温泉山、永福寺　本尊は上人自身の作といわれる一遍上人の座像。秋の「湯あみ祭り」では、この上人像の湯あみが行われる。

「鉄輪湯けむり散歩」参加者記念写真（温泉山永福寺本堂前）

市外―求菩提山資料館・耶馬渓羅漢寺

十一月十六日(日)、恒例の市外史跡探訪が実施されました。前夜の大雨の後でしたが、三十六名の参加がありました。この項もレジュメにそいながら振り返ってみます。

観光港花時計上広場を八時三十分に出発して、一路北上し豊前市千束より福岡県道三十二号線にて西に求菩提山を目指し、岩岳川沿いに上ること三十分で求菩提山資料館に到着。館長恒遠俊輔さんの案内で、説明を拝聴しながら小一時間の見学学習を終え、昼食場所豊前道の駅「おこしかけ」に向かいました。

約一時間半の「おこしかけ」屋台村にての昼食・おみやげ買いを済ませて、耶馬渓へと向かいました。青の洞門・競秀峰の紅葉を眺めながら羅漢寺に到着。リフトに揺られながら山上へ登り、堂内くぐりを終えて極楽に到達し、庭内より眺望を楽しみ下山しました。

午後のバス移動のひと時は、島節子理事さんの指導による「秋にちなんだ歌」等を合唱しながら親睦を深め予定通り無事帰りつきました。次に三重野副会長さん提供の資料を掲載しますので参考にして下さい。

求菩提山（修験の山・豊前市）

福岡県豊前市と築上町にまたがる山が、標高七八二メートルの求菩提山である、かっては火山で、古くから人々の信仰を集めていたとされ、頂上からは五，六世紀のものと推定される須恵器の小片が発見されている。伝説の域を出ないが、近世江戸時代の「求菩提山縁起」によれば

一、継体天皇二〇年（五二六）、孟覚魔卜仙の開山

二、慶雲元年（七〇四）、役行者の入山

三、養老四年（七二〇）、行善による求菩提山護国寺の創建

などのことがあったとされる。

その後、寺院は衰退したが、一二世紀（平安末期）に入って、宇佐郡出身の僧・頼厳が再興し、堂社の修復や多宝塔の造立などを行い、弟子たちと銅版法華経の勧進をも行ったという。なお彼らは自らも千日行の大業に挑み、この地に山岳信仰をベースとした修験道の芽吹く基盤を据えた。

やがて求菩提山は、「一山五百坊」と言われ、天台宗護国寺を核に多くの山伏が住み着き、厳しい修行に挑み、英彦山とともに北九州の修験道の中心としての役割を果たすようになった。しかし明治元年（一八六八）の神仏分離令にともなう廃仏毀釈の動きや、同五年の修験道禁止令によって長い歴史の歩みも終末を迎えることになった。

山中には、寺院や多くの坊跡、山頂に続く四〇〇段の石段や険阻な崖道が残り、往時を偲ばせている。

羅漢寺（曹洞宗・中津市耶馬渓町）

羅漢寺の縁起によると、当寺は大化元年（六四五）、インドの僧法道がこの地で修行したのに始まり、後平安時代には山岳仏教の霊地として天台宗の時期もあったという。

室町時代に、三代将軍足利義満から「羅漢寺」の名を賜ったという。また絶海中津の文集『蕉堅藁』下巻によれば、延文五年（一三六〇）の春、僧昭覚がこの山の大岩下の石室に入り、やがてこれを寺坊にかえ、その後間もなく、僧建順が訪れ、羅漢五〇〇躯を彫刻したという。

江戸時代前半には、下毛郡で最大規模の寺院となり、貝原益軒もその著『豊国紀行』に、「鎮西の勝地」と評している。また同寺には、銅造観音菩薩立像がある。これは開基とされる法道が、インドからもたらしたものという。八世紀前半の作とみられ、和歌山県那智勝浦町那智経塚の出土遺物にある銅造観音菩薩立像と酷似している。伝来の経緯は不明である。